(4) 鎌倉遊山にみる歴史的風致

ア はじめに

「若宮大路周辺における営みにみる歴史的風致」に記載したように、鎌倉は江の島参詣の折の通り道である江の島～金沢間の観光地として、近世の中期以降発展した。

江戸時代に入ると、貞享２年（1685 年）成立の『新編鎌倉志』をもとに、江戸時代中期に作成された『鎌倉名所記』や『鎌倉絵図』といった案内書や絵図が庶民の間に広まり、鎌倉は遊山（行楽）の目的地として多くの人々に親しまれるようになった。これらのガイドブックやガイドマップに記載された社寺や旧跡は、遊山客の訪問によって徐々に「名所」として認識されていくようになった。

図2-21 鎌倉名所記
稲村つ崎 七里つ濱

明治以降、開港地の横浜近郊にあることから、多くの外国人観光客が訪れた。『鎌倉絵図』をはじめとして、江戸時代のガイドブックは縦長の冊子が主流であったが、明治以降に横長の冊子に姿を変え、明治 20 年（1887 年）に刊行された『鎌倉江嶋一覧』には、題名が英字で入れられるなど、多くの外国人が訪れたことがうかがえる。また、明治から昭和にかけて療養地、海浜保養の別荘地として栄えるなど、鎌倉は江戸時代の庶民の物見遊山・参詣としての対象から、別荘地・観光地として変化していった。鎌倉に訪れる目的が変わっていく中でも、江戸時代に名所として多くの人が訪れた社寺や史跡は地域の人々や関係者らによって今日まで大切に残されてきた。

イ 建造物

(ア)社寺

『新編鎌倉志』や『鎌倉絵図』、その他の紀行文などに記載され、江戸時代の物見遊山の対象となっていた社寺のうち、今日まで残る社寺を一部紹介する。各建造物の詳細は第１章や「社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致」、「海にまつわる歴史的風致」に記載している。

表2-8 遊山の名所一覧

図中番号	名称	記載されている主な文献
1	英勝寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行[48]』他
2	浄光明寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
3	鶴岡八幡宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
4	八雲神社（大町）	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉日記[49]』他
5	荏柄天神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記[50]』他
6	銭洗弁財天宇賀福神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
7	佐助稲荷神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
8	由比若宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
9	葛原岡神社・日野俊基墓	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』他
10	熊野新宮	『鎌倉絵図』他
11	鎌倉宮・護良親王土牢	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀[51]』他
12	甘縄神明宮	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
13	建長寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
14	円覚寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
15	高徳院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
16	本覚寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
17	虚空蔵堂	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
18	円応寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉記』他
19	宝戒寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
20	明王院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
21	極楽寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
23	光明寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
24	覚園寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
25	長谷寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
26	杉本寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
27	安養院	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
28	寿福寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
29	浄智寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
30	浄妙寺	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
31	小動神社	『新編鎌倉志』他
32	御霊神社	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
33	永福寺（永福寺跡）	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他

※ 図中記号は図２-24 に対応している。

[48] 寛政９年（1797 年）成立。田良道子明甫著。
[49] 文化６年（1809 年）成立。扇雀亭陶枝著。
[50] 万治年間（1658 年～61 年）頃成立。浅井了意著。
[51] 延宝８年（1680 年）成立。自住軒一器子著。

（イ）史跡・旧跡

a　切通

鎌倉七口と呼ばれた七切通の「名越切通」、「朝夷奈切通[52]」、「巨福路坂」、「亀ヶ谷坂」、「仮粧坂」、「大仏切通」、「極楽寺坂切通」は、中世～近世にかけて鎌倉の出入口として、鎌倉を訪れる人にとって重要な目印となっていた。

写真2-183　朝夷奈切通

『新編鎌倉志』で記載されていることはもちろん、『鎌倉絵図』においても多く描かれており、鎌倉市内外だけでなく、鎌倉を周遊するうえでも重要であったことが分かる。それぞれの切通の詳細については、後述の「歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致」（211ページ）に記載する。

b　やぐら

鎌倉の丘陵部や斜面に造られた横穴式の墳墓であるやぐらも名所として江戸時代に遊山の対象となった。

鎌倉時代草創期の有力御家人の一人である千葉常胤の次男であった相馬師常の墓といわれる「相馬師常墓やぐら」は、『新編鎌倉志』や『鎌倉絵図』で紹介されている。

写真2-184　相馬師常墓やぐら

また、北条家最後の地と言われる「高時腹切りやぐら」は、「東勝寺跡」とともに『新編鎌倉志』で紹介され、その後刊行された多くの『鎌倉絵図』では「北条高塒腹切やぐら」として記載されている。やぐらの詳細については、後述の「歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致」（211ページ）に記載する。

52　「朝夷奈切通」の史跡の指定名称は「朝夷奈切通」であるものの、「あさひなきりどおし」と読む場合や、「朝比奈切通」という表記を用いる場合もある。

c　その他の旧跡

鎌倉幕府ゆかりの屋敷跡などの旧跡は、建造物などの形としては、そのほとんどが中世の時代に消失しており、残ったものも近世時点で多くが消失している。しかしながら、源頼朝や北条家など鎌倉幕府との結びつきが強い旧跡は、往時をしのばせる場所として江戸時代の人々は多く訪れたと推察される。その証拠として、『新編鎌倉志』で取り上げられたことはもちろん、『鎌倉絵図』にも多く記載されている。

写真2-185　十一人塚

代表的なものとして、十一人塚を紹介する。それ以外の主な史跡・旧跡は表２－９に示す。

十一人塚は稲村ヶ崎から江ノ電「極楽寺駅」へ向かう道沿いにひっそりとたたずむ供養塔である。この地域には、元弘３年（1333 年）の新田義貞による鎌倉攻めの際に、極楽寺坂切通の北条側の守りを突破した新田軍の大将の大舘宗氏（おおだちむねうじ）が、その後の猛反撃により、奮戦むなしく最後まで残った 11 人とともに討死したという話が残っている。この十一人塚は、そのときの 11 人を弔うため設けられた。鎌倉市指定の史跡である。

写真2-186　十一人塚の
史跡指導標

敷地内には、供養塔のほかに昭和６年（1931 年）３月に鎌倉町青年団により建てられた史跡指導標という石碑が建っている。高さ約６尺、幅約２尺５寸の仙台石で作られている。一覧表で紹介した旧跡や名所にあったであろう建造物は、前述したようにすでに失われてしまっているが、鎌倉のまちの至るところでこのような石碑を目にすることができる。江戸時代の人々が巡っていた旧跡・名所の説明板として、鎌倉独自の景観を生み出している。

表2-9 旧跡等

図中記号	名称	記載されている主な文献
a	和賀江嶋	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
b	段葛	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
c	北条高時腹切りやぐら	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
d	十一人塚	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
e	稲村ヶ崎	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
f	星ノ井	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
g	稲瀬川	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
h	阿佛邸旧跡	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『三浦紀行[53]』他
i	大蔵幕府旧跡	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『諸国道中金の草鞋』他
j	盛久頸座	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
k	東御門	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
l	西御門	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『東海道名所記』他
m	永福寺跡	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』他
n	若宮大路幕府旧跡	『諸国道中金の草鞋』『東海紀行[54]』他
o	安達盛長邸跡	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『鎌倉紀』
p	畠山重忠邸跡	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』
q	二十五坊跡	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
r	歌ノ橋	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
s	夷堂橋	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
t	筋替橋	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
u	乱橋	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』『相中紀行』他
v	相馬師常墓やぐら	『新編鎌倉志』『鎌倉絵図』
w	和田塚	『鎌倉絵図』

※ 図中記号は図２-24 に対応している。

ウ 活動

（ア） 鎌倉遊山

江戸時代、鎌倉は江戸から気軽に訪れることのできる遊山の地として親しまれ、多くの人々が鎌倉に訪れた。主な旅の経路は、江の島から腰越、七里ガ浜、稲村ガ崎、長谷を経て若宮大路へと至り、さらに朝夷奈切通を通って金沢方面へと抜ける経路や、江戸から東海道を経由、または船で金沢まで来て、金沢から朝夷奈切通を通り、鎌倉に入り、江の島へ至る経路であった。これらの道筋は古くから参詣・行楽の旅路として多くの人々が行き

[53] 享和元年（1801 年）成立。一鶴堂白英著。
[54] 安政６年（1859 年）成立。小田切日新著。

交ったルートであり、江戸時代の紀行文に繰り返し登場する風景である。

『相中紀行[55]』には、「稲村ヶ崎の出さきを袖ヶうらと云、様々の旧跡あり。いなむらの崎の茶屋に休。ばゞが茶屋といふ由。ここにて鎌倉の絵図をひさぐ。家とじ我は顔に古都の講談す。」とあり、『鎌倉日記[56]』にも、「よこてが原なんどいへる所は、いにしへの戦場なる由、土人（十一人カ）の□（塚カ）ほそき道の片はらに、小高くつきたるうへに、石の印をたてあり。」と記されているように、中世鎌倉の歴史や文化、風景を楽しむ様子が数多く描かれている。

現在でも、当時の人々が歩いたとされる道筋には、葛飾北斎や歌川広重などが描いた富士山と江の島を望む風光明媚な景観や、数々の紀行文、『新編鎌倉誌』、『鎌倉名所記』、『鎌倉名所絵図』等の文献に書かれた鶴岡八幡宮をはじめとする歴史的な社寺、切通などの史跡・旧跡が数多く点在している。これらを巡りながら、往時の旅人の心に思いを馳せることができる環境が江戸時代から続いている。

明治時代以降、横須賀線や江ノ島電鉄、路線バスといった交通機関の整備により、日帰りで訪れる人々も増え、季節の見頃の花々が咲く社寺巡りや鎌倉のハイキングコース散策、別荘建築めぐりなどテーマ別観光の多様化が進展し、遊山から観光へと形は変化しながらも、多くの人々が鎌倉を訪れている。さらに、明治時代から広がった海浜レジャーの地として、海水浴や磯遊び、海辺の散策といったレジャー活動と古くからの社寺や史跡、別荘建築物めぐりを組み合わせる来訪者や、江の島、富士山を望む海辺の景観を楽しむ来訪者も見ることができる。

季節ごとに表情を変える緑や海の景観と、長い時を経て現在に伝わる社寺等の歴史的遺産によって、各所において鎌倉ならではの歴史や自然に触れることを楽しむ人々を見ることができる。

図2-22 冨嶽三十六景 相州七里浜 葛飾北斎
天保元年(1830年)～天保3年(1832年)頃

図2-23 冨士三十六景 相模七里ケ濱
歌川広重 江戸時代

[55] 寛政９年（1797年）成立。田良道子明甫著。
[56] 文化６年（1809年）成立。扇雀亭陶枝著。

（イ） 歴史的遺産の顕彰・保護活動

中世の時代から現在まで残った社寺や史跡の名所の数々は、美しい緑や海岸地域の景観とともに多くの人々を引きつけてきた。しかし、来訪者が求める鎌倉固有の景観や歴史的資源は、必ずしも常に安泰であったわけではなく、何度も喪失の危機に見舞われてきた。

武家の都として栄えた鎌倉は、鎌倉幕府の滅亡や室町時代の鎌倉府の消滅によって荒廃し、明治時代の神仏分離令による廃仏毀釈の風潮により社寺は大きな打撃を受けた。加えて、関東大震災では多くの歴史的建造物が損壊し、貴重な文化資源の多くが失われた。

このような危機的状況に直面しながらも、今もなお中世の趣や自然、景観が残っていることは、各時代における地域の人々や関係者の保全活動によるものが大きい。

『新編鎌倉志』に紹介され、その後江戸時代の遊山の対象となった名所では、鎌倉の歴史が風化しないよう顕彰活動が行われ、その場所の案内や歴史などを刻んだ史跡指導標などが建てられた。これらは、大正６年（1917 年）から昭和 31 年（1956 年）の間に鎌倉町青年会[57]や鎌倉町青年団、鎌倉同人会などの民間の団体により、鎌倉に対する郷土愛の具体化と鎌倉の発展を目的として建立された。大正時代以降に建立された後、現在まで定期的に地域の人々やボランティアによる周囲の清掃や草刈りが行われており、風化など経年劣化は見られるが、十一人塚をはじめとして、建立当初の姿を残しているものが多い。

近年では、ＮＰＯ法人鎌倉ガイド協会が主体となり、史跡指導標を３基建立している鎌倉同人会とともに、史跡指導標の文字の塗料を塗りなおすなど、その保全に努めている様子が折々で見られる。

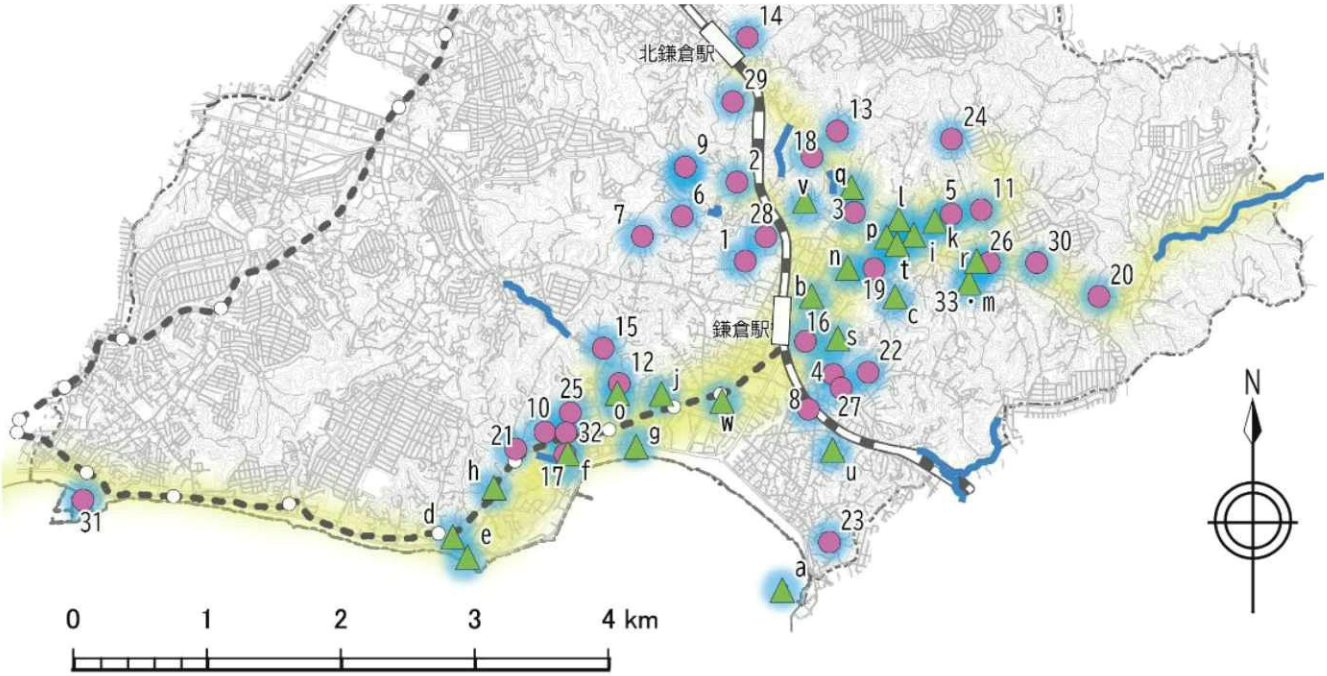
写真2-187 十一人塚の史跡指導標
（昭和 48 年(1973 年)）

写真2-188 十一人塚の史跡指導標

[57] 鎌倉町青年会は、鎌倉に住む人々により結成され、その後、「鎌倉町青年団」、「鎌倉市青年団」と名称を変えながら、鎌倉の教育、社会奉仕、文化振興など多岐にわたる活動を展開した。

このような歴史的遺産の顕彰・保全活動により、鎌倉に訪れた人々は、江の島から稲村ヶ崎、由比ヶ浜といった海沿いの道筋から、若宮大路、朝夷奈切通に至るまで、江戸時代の遊山客が親しんだ名所やその歴史を知ることができるとともに、それらを大切に守ろうとした先人たちの思いに触れることができ、江戸の遊山文化から現在までの鎌倉の重層的な歴史を体感することができる。

写真2-189　史跡指導標の清掃活動
（NPO法人鎌倉ガイド協会）



●	歴史的風致を形成する建造物	鎌倉遊山における参詣社寺
▲		鎌倉遊山における訪問史跡・旧跡
―		切通
	鎌倉遊山の主な経路	
●	歴史的遺産の顕彰・保護活動が見られる範囲	

図2-24　鎌倉遊山にみる活動の市街地への広がり

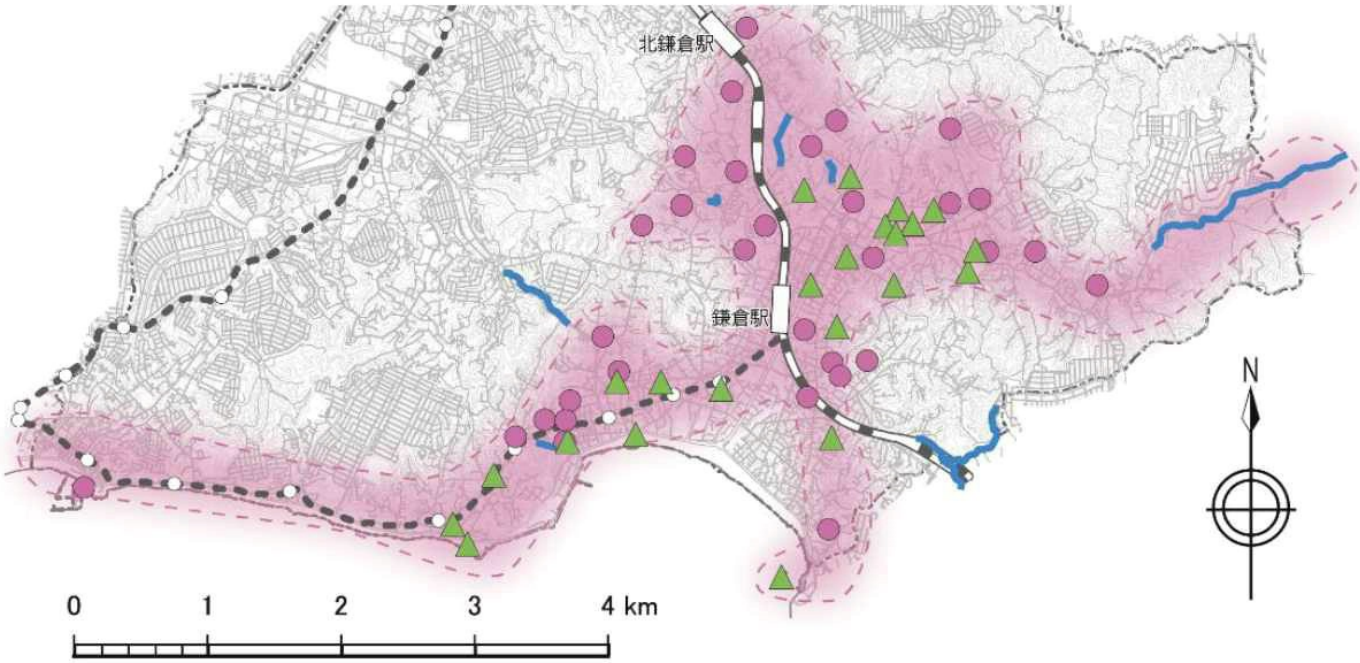
※　社寺と史跡・旧跡等における図中番号・記号はそれぞれ表２－８と表２－９に対応している。

エ まとめ

近世以降、庶民による鎌倉遊山の広がりを通じて鎌倉の景観や数多くの社寺・史跡が名所として親しまれるようになった鎌倉では、そこに残る歴史的遺産や昔から変わらない風光明媚な景観を見ることができ、今でも往時の遊山を体感できる。すでに姿を消してしまった史跡も少なくないが、大正期以降に設置された史跡指導標などにより、かつて中世に武家の都として栄えた鎌倉の歴史や記憶を、現在の私たちに語り継いでいる。

これらの歴史的遺産が残っている背景には、その歴史を顕彰し、後世へ伝えていこうとする人々の思いが込められており、その精神は、鎌倉に住む多くの市民に受け継がれ、市民主体の保全活動につながっている。

江戸時代の人々が遊山を通じて味わった鎌倉の自然や風情は、現代においてもなお、変わらぬ魅力として体験することができ、鎌倉独自の歴史的風致を形成している。



●	歴史的風致を形成する建造物	鎌倉遊山における参詣社寺
▲		鎌倉遊山における訪問史跡・旧跡
―		切通
◯	鎌倉遊山にみる歴史的風致の範囲	

図2-25 鎌倉遊山にみる歴史的風致の範囲